

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 ＜シリーズ「中国と向き合う」第3回＞

日 時：2021年12月2日（木）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：人材流出と資源獲得：貴州石村の村落ガバナンス

報告者：田原 史起（東京大学大学院総合文化研究科教授）

2021年12月2日（木），アジア・太平洋研究センター主催「中国と向き合う」のシリーズ第3回の講師として，東京大学大学院総合文化研究科・田原史起教授をお招きし，「人材流出と資源獲得：貴州石村の村落ガバナンス」をテーマにオンラインでご講演いただいた。

中国農村の問題をめぐるのは，外部目線による「三農問題」として都市部の格差ばかりが注目される。講演者はそうしたバイアスを相対化し，農村研究に当事者目線・暮らしの視点を持ち込む試みを続けてきた。「農村地域に住む人々は，共同的な生活（物質的・精神的）に関わる種々の問題をいかにして解決しているのか」との問題意識から，コミュニティが主体となって工夫しつつ展開する組織的営みを「ガバナンス」と呼び，人々がいかにして政府（公），市場（私），コミュニティ（共）の資源を組み合わせ，問題を解決しているのかを解き明かす。

本日の舞台は山深い貴州省奥地の苗族居住地域，「石村」である。近年の石村では，①道路，②教育，③埋葬，④民族文化など，様々な領域にまたがるガバナンスが展開していた。一見してバラバラに見えるこれらの営みは，実は見えない「赤い糸」でつながっていた。それを解き明かす鍵が，「人材流出」による「資源獲得」というメカニズムである。

道路：石村は険しい山岳地帯に位置し，地理的な位置や交通条件の制約から，地元経済の「発展」は最初から期待できない状況にある。この前提条件は，私たちが思う以上に重要である。「道路」の改善は地元の生活向上には必須だが，コストが高すぎるために，コミュニティ外部の政府の力に頼るしかない。政府の側も損を承知で，回収できない投資を行う覚悟が必要となる。それを可能にするのが，地元出身の有力者—いわゆる「第三の力」である。

教育：いっぽう，地元の発展の可能性が閉ざされているからこそ，地元を抜け出して，成功の階梯を駆け上がるための教育重視の伝統が住民の間に生まれてくる。極め

て辺鄙な村でありながら、多くの大学生を輩出しているのは、教育重視がすでに地域の風土を形成している点を物語る。とりわけ近年では、住民の期待に応えられない公立学校に代わり、私立学校を主体とした教育ガバナンスが展開されていた。

聴衆の皆さんの中には、次のような疑問もつ人がいるかもしれない。すなわち、教育を通じて、あるいは政治的栄達を遂げた優秀な成績を取めた人材であるほど、郷土を離脱してしまい、教育の目的が達成されればされるほど、郷土からは人材という資源が失われるのではないかと。確かにそのとおりである。教育を通じて、空間としての郷土に「残る人」と「出ていく人」が分化してくるわけだが、教育を通じて村を「出ていく人」は都市部で企業や政府機関での優勢なポストに就く。しかし、彼らは出ていったきりではなく、村に「残る人」を優勢な資源でもって援助することが期待されている。

埋葬・民族文化：ここで、援助の「期待」を支える根拠となっているのが、広い意味での家族的なつながりや、文化的なまとまり、一体性である。「埋葬」や「民族文化」のガバナンスは、立身出世を遂げた地元人士を、曲がりなりにも地元へ繋ぎ止める役割を果たしている。ホスト・ファミリーの隆家の墓碑の建立時、成功人士を含む血縁コミュニティのメンバーは都市から帰還し、活動に参加した。埋葬は、過去から未来への「つながり」を再確認する活動として、維持されていた。また血縁コミュニティをこえたより広い「喇叭人」としての民族アイデンティティを再編していく活動として、山歌イベントなどの文化活動が展開されていた。

流出した人材が、流出したままにならず、同族とその拡張としての故郷にアイデンティティを持ち続けた場合、成功人士を通じて都市部の資源が故郷に環流することになる。もちろん、こうしてもたらされる資源の総量は、ごくささやかなものであるかもしれない。しかし、人材と資源が循環する経路が確保されていることそれ自体が、石村のような山地村落で人々が暮らしをつないでいく上では、格別に重要なことなのである。

(文責：星野 昌裕)